

健康と光線

海水浴をする

風邪を引かない

近年、免疫に関する学説は極めて複雑になっていますが、免疫とは疫を免れる、すなわち病気に罹りにくいことと簡単明瞭に理解していた頃から、夏、海水浴をすると、冬、風邪を引かない、と言うことは経験的に知られていました。そして現在の免疫学は、風邪を予防するのも治すのも、各人に備わった免疫機能を総動員した結果であることを教えています。

風邪と診断される症状を起す始どの原因はウィルス感染ですが、原因として九種類のウィルスが知られており、一括して風邪症候群と呼ばれます。この風邪のウィルスに効く薬はありませんので、風邪薬と称する薬は症状を軽くするだけの対症療法薬に過ぎず、しかも副作用はありますので、治療は体力を温存することに気を配り、いわゆる風邪薬は服用しない方がむしろ

無難です。

さて海水浴をすると風邪を引かないという言い伝えは、海水浴をするとき必ず浴びる日光に免疫を強化する作用があるためです。免疫がしっかりと監視していれば、風邪のウィルスは侵入できないか、侵入しても撃退されてしまいます。

風邪は免疫で治る

日光浴の免疫機能に及ぼす効果の一つに、ビタミンDのカルシウム代謝調節作用があります。すなわちこれまで「自然と共生して生きる」で取り上げた生活習慣病で述べたように、ビタミンDにはカルシウムパラドックスを防いで細胞の情報伝達に欠かせないカルシウムの体内分布の恒常性を保持する作用があります。したがってビタミンD欠乏でカルシウムの体内分布の恒常性が失われれば、一兆個といわれている免疫担当細胞が一糸乱れず相互に連携してウィルスと闘えなくなります。

発行所

〒153-0063

東京都目黒区目黒

4-6-18

サナモア光線協会

年4回発行

会費年500円

電話 東京 (03)

3793-5281

3712-5322

免疫をどのようにとらえるか

—自然と共生して生きる その7—

サナモア光線協会
サナモア中央診療所

医学博士 宇都宮 光明

(サイトカイン)を産生する細胞やウィルス感染細胞を殺すキラーT細胞を増やして対抗します。この一連の反応が細胞性免疫です。これと並行してヘルパーT細胞がB細胞にウィルスにミサイル攻撃をしかける免疫グロブリンの産生を命じます。これが液性免疫です。このように免疫に関わるすべての機能を総動員して、風邪の原因ウィルスに

総攻撃をしかけるのです。

ビタミンDの細胞分化誘導作用

ビタミンDはカルシウム代謝調節作用によって免疫を強化するだけでなく、前述の免疫担当細胞に直接作用して細胞分化を促し、免疫を調節することが明らかにされています。すなわちビタミンDの受容体はマクロファージや活性化したリンパ球(T細胞、B細胞)に存在し、単球のマクロファージへの分化やT細胞のヘルパーT細胞への分化を促し、それぞれの機能を

発揮するように誘導します。またNK細胞やキラーT細胞の細胞障害活性、すなわちウィルス感染細胞に対する攻撃力を増強する作用があります。

夏の日光浴で

冬の免疫力を強化

風邪症候群の中でもインフルエンザは、原因になるウィルスが低温で湿度が低い冬の環境で活発に活動する性質を持ち、感染力が強くしばしば重篤な合併症を伴います。殊に免疫機能が未発達な乳幼児(抗原に接することで免疫機能は強化される)や免疫機能が低下する高齢者で死亡例が増えるため恐れられています。このようにインフルエンザはビタミンDが最も欠乏し、免疫力が低下する冬に流行しますが、夏の日光浴が冬になっても免疫力を高めるのは、ビタミンDは脂肪に溶ける(脂溶性ビタミン)ために数ヶ月は体脂肪組織に蓄えておけるからです。風邪のウィルスと闘うのは各人の免疫力(自然治癒能)です。それには体力の消耗を防ぐ一般養生法、すなわち安静、保温、水分補給、栄養摂取などに加え、サナモアを照射して免疫力をベストな状態に保ち、風邪のウィルスと闘って下さい。

(関連記事を五、六面に掲載)



茶摘み

宇都宮義真撮影



讃光譜



春は体調をくずし易い

春一番が吹く木の芽時、陽気もポカポカ暖かく心地よく感じる頃になると、かえって身体の不調を訴える人が増えてくるが、木の芽と同じように病氣も芽を出すのである。特に平生余り健康でない人にとって、春は鬼門である。

アレルギー体質の人がアレルギー症状を起こし易いのもこの頃である。眼科はアレルギー性結膜炎の患者でにぎわい、耳鼻科はアレルギー性鼻炎の患者で繁盛し、小児科や内科は喘息の発作を起こした患者が多くなる。気温や湿度が細菌やカビの繁殖に適した状態になるため、皮膚病が悪化したり顔や身体に吹き出物が出たりする。かくして行楽の春は憂鬱の春となる。

どんな事でも物事には必ず何かの原因があるが、春になると体調をくずし病気になる人が多い原因の一つに、冬の間は地上に達する日光が弱く、しかも空気の汚染されがちな室内にとじこもって暮らしているため、知らず知らずのうちに身体の抵抗力が衰えていることがある。

春の胃腸障害

春は胃腸障害を起こし易い。春に「食欲の春」と言わないのは、冬の間は光線欠乏や運動不足で胃腸の働きが弱まり、正月

以降無理に食事をつめ込んだ影響もあって、春には胃腸は過労状態にあり、食欲もわかないためである。そこに花見の一杯で、胃腸は遂に悲鳴をあげざるを得なくなる。山海の珍味を送り込んでも、胃腸は消化不良を起こし、消化不良は必然的に体力の衰弱を来し、体力の衰弱は一層胃腸の機能を衰退させる悪循環に陥る。

このような悪循環は何処かで断ち切らなければならぬが、世間で多く用いられている対症療法では、根本的な解決にはならない。消化不良なら消化剤を与えれば良いと思うのは、一時的には効いたとしても、原因から治す治療法にはならないし、胃腸の病気による腹痛に痛み止めの注射をすれば、胃腸運動を止めるため一時的に痛みは和らぐが、やはり本当の治療法には程遠い。根本的には、自前の消化酵素を噴水のように噴き出させて消化を助け、胃腸運動が正しい動きを取り戻すようにしなければならぬ。

春の日光浴の効用

冬の間は出不精を決め込んでいた人も、冬に減退したさまざまな機能の回復をはかるためには、春になったら屋外に出て新鮮な日光を浴びながら運動するようにすることが大切である。冬の日光に比べ著しくエネルギー

量を増した春の日光は、皮膚を鍛錬し、皮膚は日光のエネルギーを吸収して健康に必須な栄養素を生成する。皮下の7-デヒドロコレステロールはビタミンDとなり、ヒスチジンはヒスタミンに変化するが、これらの物質は直ちに血管網を介して全身に運ばれ、生体の諸機能を旺盛にするので浚刺とした力がある。

春一番が吹く季節

宇都宮 義真

なぎってくるのである。

胃腸障害と光線療法

光線は直接的には皮膚に作用するが、間接的には光線の作用で生成される光産物を介してあらゆる器官、臓器に作用を及ぼしている。反面、皮膚は皮膚呼吸や発汗によって肺や腎臓等の内臓の機能を代償しているが、このように皮膚と内臓は密接に

関係しているのである。ところで光線の作用でヒスチジンがヒスタミンに変わることは既述したが、ヒスタミンには胃腸の動きを促して食欲を増す作用がある。加えて光線の細胞を活性化させる作用や深部まで透過する温熱作用は、胃腸障害を治し胃腸運動を正常にする。具体的には胃液(胃酸)の分泌の過少があれば分泌を促して消化吸収を助け、分泌過多があれば抑制して胃腸の粘膜を保護し、炎症がある場合には局所充血により速やかに炎症を鎮め、胃腸運動を調整し、胃腸の機能を強化するのである。

実際、胃痙攣や大腸炎の患者に光線を照射すると、腹痛は治まり、下痢は止まり、速やかに快癒する。胃・十二指腸潰瘍のような病気でも、症状は軽減し、多くは手術の必要がない。また慢性の胃腸病の人は、気力に乏しく、計画性はあっても実行力が伴わないため、あたかも有為の才に恵まれても活かせない場合があるが、これらの人にも光線療法を勧めたい。何故なら光線照射は最も合理的な胃腸(消化器)の強化療法になり、したがって健康に自信が持てるようになることを確信するからである。

「健康と光線」

昭和27年4月5日発行

―春と胃腸障害―

を引用した。

体内時計が刻む日内リズム

一日は24時間で、日々の日程は時間で決められていますので、時計が正確に時を刻んでいないと生活のリズムは滅茶苦茶になってしまいます。そのため時計の時刻は正確に調節しておかないと社会生活はいとなめません。

時刻は正確に調節しておかないと社会生活はいとなめません。

同様に地球

の自然環境に

適応したヒト

を含むあらゆる生物は、昼

夜の睡眠と覚

醒のリズムや

体内の複雑な

活動のリズム

を一日24時間

にきちんと同

調させる体内

時計を持っています。この生理

的なリズムは時計遺伝子の支配

を受けていますが、実は24時間

よりわずかですが長い固有のリ

ズムなのです。そのため時計の

時刻を合わせるように、体内時

計を外部環境に合わせて同調さ

せる必要があります。その役割

時間生物学から健康を考える

— 光線が体内時計の同調因子 —

協会 医学博士 宇都宮 光明
光線協同 光線協同
サナモア中央診療所

をになっているのは、すべての生命を生んだ太陽エネルギーの源の光線です。このようにしてつくられる一日のリズムを日内リズム（概日リズム）あるいはサーカディアンリズムと呼びます。

日内リズムは単細胞生物から哺乳動物のヒトに至るまで、あらゆる生物にあります。ヒトの場合、朝、陽光が目から入ると光線のエネルギーによって励起されたメッセージは網膜を通過して視神経に伝えられますが、その一部は体内時計の中枢と考えられていて視床下部の視交叉上核を経て脊髄に達し、更に上頸部神経節に行き、そこから松果体に伝達されて松果体ホルモンのメラトニンの分泌が減少します。これらの情報はヒトのあらゆる機能を目覚めさせ、活動に適したリズムを始動させます。

一方、陽が落ちて暗くなるとメラトニンの分泌が増し、睡眠や休息に適したリズムになります。ヒトはこのようにして日内リズムを調節すると考えられています。ヒトは、全盲の盲人に日内リズムがあり時差ボケを起こすことから、目以外で太陽エネルギーを感じて日内リズムを同調さ

せている可能性が指摘されていましたが、未解決なまま残されていた。

目以外の日内リズムの調節機構

調節機構

盲人の体内時計を外部環境に合わせてリセットするのは、一般には時間に拘束された社会生活を強いられるためと考えられ、太陽エネルギーを目以外に皮膚でも感知するの否かについては明確ではありません。

健康で長生きのリズム

各々三時間照射し、体内時計の時間を進ませたり遅らせたりしたのです。彼らは適切な時間帯にこの方法を応用して体内時計の日内リズムの時間をリセットすれば、睡眠障害、時差ボケ、日勤と夜勤の昼夜のシフト労働による睡眠障害などを上手にコントロールする有効な治療法になると述べています。

健康で長生きのリズム

健康で長生きのカギは、日内リズムを太陽エネルギーの光線に同調させることが握っています。この日内リズムが崩れると、睡眠、体温、血圧、心拍、尿量、ホルモンや酵素の分泌、食欲、自律神経機能、精神状態など生体恒常性（ホメオスタシス）を保つ生命現象もリズムを失いますので、身体は変調を来し健康を失うこととなります。しかしその一方で、長生きをするに年齢に伴って体内時計が故障し、日内リズムが崩れやすいことも知られています。

加齢に伴って体内時計の日内リズムが崩れるのは、体内時計の中枢とされる視交叉上核の機能低下によると考えられています。

す。すなわち視交叉上核の機能が自然環境に適応できなくなるため、日内リズムの調節が利かなくなり、これが高齢者で見られる早朝覚醒や夜間睡眠障害を起こすとされています。またアルツハイマー型痴呆でも日内リズムは失われますが、その原因として視交叉上核の細胞の変性や減少が関わっていることが指摘されています。

健康で長生きするには、体内時計の中枢の視交叉上核が年をとっても若々しい機能を保ち、正確な時を刻まなければなりません。それを助ける最善の手段は、日頃から屋外でよく光線を浴び（室内照明の光ではルックス不足で無効です）、まめに身体を動かすことです。特に春は冬に不足した太陽エネルギーを身体一杯に吸収して、日内リズムを自然環境に同調させる絶好の季節です。そうすることで視交叉上核の体内時計は活性化して日内リズムを取り戻し、健康で長生きにかなうリズムと同調するはずで。

なおサナモアを基本照射に併せて、顔に目は閉じて明け方に一時間、同様に日暮れ時に一時間照射すれば、睡眠障害や痴呆を予防する効果があります。

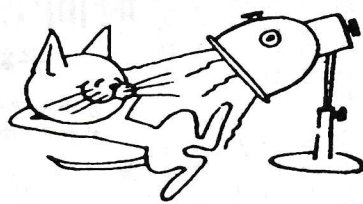
☆糖尿病性腎症

症例 57歳 男性 自営業

症状 約十年前より糖尿病を患い、医師の指導を真面目にまもり、血糖は概ね安定していたが、

一年程前に蛋白尿と高コレステロール血症と高血圧を指摘され、糖尿病性腎症を併発したことが告げられた。その後も通院しているが、糖尿病性腎症を治す治療はないといわれている。古くからのサナモア党の従兄弟の勧めで来所したが、顔がむくんでいた。

療法経過 BDカーボンで、集光器を使用して喉10分、後頭部10分、開放で腹20分、背10分、腰10分、膝20分、足裏30分照射した。



— 治 験 例 報 告 —

翌日から自宅治療にしたが、カーボンはBDに固定せず、A、B、Dを適宜組み合わせを変えて使用すること、腹、腰、足裏等は日に二回の照射を指示した。その一ヶ月後に来所したが、顔のむくみは気付かないほど改善しており、尿の出が以前より良くなったといっていた。三ヶ月後の検査で血糖は正常範囲内にあり、蛋白尿の程度は軽く、血中コレステロールの値は正常といわれた。

患者は周りから先は透析と脅かされた時には、目の前が真っ暗になる思いをしたが、今は次第に良くなるという希望が湧いてきたので、病院で指示された以前より厳しい食事療法をまも

☆妊娠に合併した湿疹

症例 35歳 主婦

症状 妊娠八ヶ月。約一ヶ月半前から全身に湿疹が出て痒くてたまらず、病院で薬をもらい治療したが、一ヶ月経っても痒くて困りはて再度病院で相談したところ、これ以上は胎児に影響があるのでは出せないといわれた。

その半月後にサナモア愛用者の母親に連れられて来院されたが、光線療法は胎児にも効果はあるが悪影響は全くないことを説明

りながら、サナモアを第二の主治医と考えて、病気に対していくと話している。

神戸市 ウエノ光線療研
上野 健太郎氏報告
TEL07七八一三三二一三五八

☆潰瘍性大腸炎

症例 38歳 女性

症状 サナモア愛用者から、下痢きみで便に血が混じり、痔ではないかと思うが、腹がじくじく痛むので、病院に行くまで光線療法をしたいと質問された。

照射方法の指示にあわせて、必ず病院で診てもらうように話した。

療法経過 BDカーボンで腹部に前方と左右から各20分から30

して治療を始めた。なお冷やさないようにし、新鮮なものを食べ、ほこりっぽいところには行かないように注意した。

療法経過 四台の治療器を使い、Aカーボンで全身に四灯照射をした。照射部位は発疹や痒みの患部に加え、側臥位で顔、腰、腹、後頭部、ふくらはぎに各15分、仰臥位で一号集光器を使い耳、甲狀腺部、脇腹、膝に左右から各10分照射した。なお自宅でも寝る前に痒みを和らげるため光線療法を併用するようにした。

サナモアカーボンの類似品にご注意下さい

サナモアA、B、C、Dカーボンは、その使用法を書いた著書「光線療法学」ともども愛用者各位の御信頼を頂き、全国津々浦々まで高い評価を受けておりますことは、皆様方よくご存知の通りであります。

ところが他社製カーボンに「光線療法学」をセッとしたり、サナモアA B C Dと効果が同じという根拠も無いような文句で互換表を添付して販売している業者がいます。もとより、このような道理にもとる行為をする者が何時の世にもいますが、当研究所としては他社製カーボンを使用した場合の効果について一切の責任はもてませんので異々もご注意ください。

(サナモアカーボンには、製造元イビデン株式会社の商標「B」のマークが必ずついています)

東京光線療法研究所

分、A Bカーボンで肛門、基本照射として足裏、膝、腰、後頭部を各15分位照射するように指示した。

その後、病院で潰瘍性大腸炎と診断され、数種類の薬を指示通りに服用したが、胃腸の具合

治療をして三日目から湿疹は改善し、冷えを感じずに眠れるようになった。湿疹は七日目には見た目には明らかに良くなり、それから順調に経過したので、当院の治療は十五日で打ち切り、後は自宅で治療を続けるように指示した。その後、母親と本人から湿疹は出なくなり、元気な男の子が生まれたと喜びの報告があった。

川崎市 東京光線治療院
海渡 一二三氏報告
TEL04四一七二二一五〇六七

が悪くなり、血便もひどいがどうしたら良いかと再び問い合わせてきた。

光線療法は血便を止めるために腹部はA CからA Dにしてそれぞれ30分以上照射するようにし、血便がなくなったらB BかB Dに変えて同様に照射すること、A Bで基本照射を必ずするように指示した。なお消化のよい食物をとり、コーヒーのような嗜好品や香辛料のような刺激物はやめるように、ストレスはためないように話した。

二ヶ月ほどして連絡があり、薬は怖いので全部やめ、光線療法だけで血便も腹痛も治まっているといっていた。

福岡県春日市 育美健康光線療研
山崎 いく子氏報告
TEL0九二八 五八一二〇三九 五七二一五三七

アレルギーは増えている

免疫系は体内に侵入した抗原に特異的に結合する抗体をつくり、抗原抗体反応で抗原を排除して身体を守る防衛機能として作用しますが、時に抗原に対して免疫応答の範囲を越えて過剰に反応し、自己の組織を障害することがあります。このように免疫系が暴走した状態をアレルギーあるいは過敏症と呼びます。

このアレルギーは先進国で著しく増えており、厚生省の最近の調査では三人に一人はアレルギーを有しているとされています。例示すれば、第二次世界大戦までは極めて稀とされていた花粉症は人口の10%を越えました。小児のアトピー性皮膚炎は5%以上と推計され、以前は成長に伴って減少し成人例は稀でしたが、今は成人例が非成人例を凌駕する勢いで増えています。小児気管支喘息は以前の二・四倍になり5%を越えたと見なされています。

アレルギーは何故増えた

病因には内因と外因があります。アレルギーの内因として遺伝との関係が古くから指摘されていますが、遺伝で患者の増加は説明できません。そのため文

明の進歩に伴う環境の変化が新たな外因をつくり、患者の増加を招いたと考えられています。すなわち外因になる抗原をアレルギーと呼びますが、環境アレルギーとして日本の高温多湿な環境を無視した住宅のハウスダスト(家ダニ、カビ、室内で飼育するペットの羽毛や糞などを含む室内塵)、花粉の増加(スギ、ヒノキ、ブタクサ)、食習慣の変化(卵、牛乳、大豆の三大アレルギーに)

小麦、米を加えて五大食物アレルギーと呼ぶ)、大気汚染(工場の煤煙や自動車の排気ガス)、合成化学物質、薬剤などがあげられています。

増えつづけるアレルギー

—免疫をどのようにとらえるか・補遺—

サナモア光線協会
サナモア中央診療所

医学博士 宇都宮 光明

これがアレルギーは文明病といわれる所以ですが、文明はアレルギーのみならず生活の場から自然を遠ざけたことで免疫系の機能を障害し、内因からアレルギーに過剰に反応するように変えたこともアレルギー増加の要因と考えられます。

アレルギーは何故都市に多い

アレルギーの都市の有症率は

郡部の二・四倍と高いことが厚生省保健福祉動向調査により明らかにされました。例えば花粉症や喘息は首都圏の都市の人口過密地帯で増えています。その病因として大気汚染物質、中でもディーゼル車の排気ガスがアレルギー応答を促すと報告されていますが、この説には異論もあり結論は得られていません。アトピー性皮膚炎は家屋の密閉化や冷暖房の完備、さらには絨

都市に多い理由に環境アレルギー以外の原因が関わっている可能性を示唆します。その中でも都市生活では郡部に比べ自然に接する機会をより失うことが、前述したように内因からアレルギーになり易くしたと考えられます。すなわちアレルギーを制御するには自然を取り戻す必要があります。

寄生虫はアレルギーを抑制する

最近、寄生虫の感染が減ったために花粉症や気管支喘息や蕁麻疹のようなアレルギー性疾患が増えたという興味深い学説が反響を呼んでいます。この学説を理解する上で必要な即時型アレルギー(I型ともいう)について花粉症で説明します。

花粉(抗原)を吸入すると「Ⅲ」はアレルギー反応に関係する肥満細胞と呼ばれる粘膜にある細胞の表面に付着します。そこに再度花粉を吸入すると花粉は細胞表面の「Ⅲ」と結合して抗原抗体反応を起こして細胞外に炎症を起こす物質を含む顆粒を

放出し、数秒から30分以内に炎症症状を起こします。そのため即時型アレルギーと呼ばれるのですが、寄生虫感染があると花粉と結合しない特殊な「Ⅲ」抗体が産生されて前もって肥満細胞の表面に付着しているため、花粉は「Ⅲ」抗体と結合できず、したがって花粉症を起こさないと

この学説につながった疫学的研究として、アフリカの山間の住民が都市に移住して寄生虫が駆除されるとアレルギーを発症し易いことや、東西ドイツで寄生虫感染率の低い西ドイツでアレルギーが多いことがあります。確かに寄生虫と人類との関わりは人類発祥からのものであり、両者が共存共栄の関係にあるという説には説得力があります。しかしこの説でアレルギーの増加は説明できても、日本では全国的に寄生虫の感染率に差がないことから、都市と郡部のアレルギーの有症率の違いを説明するのは無理と思われる。

内因から

アレルギーを抑える

人類が一貫して追求した文明が新たなアレルギーを生みアレルギーの増加を招いたとしても、
△六ページへつづく▽

△五ページからつづく▽

文明の歯車を後戻りさせることはできません。しかも残念ながら人類は未だ人知をもって内因からアレルギー応答を制御する有効な手法を開発できずにいます。

そのためアレルギー対策は外因にかたよらざるを得ません。すなわち花粉症や食物アレルギーのように前もってアレルギー症状を起こすことが予測される場合には、抗原の花粉や食物を回避するように勧められます。しかしそう言われても抗原を完全に回避してアレルギーを防ぐことは到底できません。そのため抗原に接してもアレルギー症状を抑制する薬を事前に投与されることもあります。アレルギーを抑え切れずにアレルギー症状が出ると、症状をターゲットに対症療法をするしかないのが実情です。

しかしアレルギー対策はこのような抗原回避や対症療法だけでなく、内因からアレルギーを抑制する方策があるはず。この点については健康は自然によって与えられ、健康はアレルギーを制御する、という原点に思いを及ぼす必要があります。その中で重要な役割を果たす光線の免疫に及ぼす作用について

は、本紙に「免疫応答を調整する光線療法」の題で、平成7年7月1日、同年10月1日、平成8年1月1日と三回に分けて詳しく述しました。その内容の一部を再録すると、都市生活で欠乏症を起こし易いビタミンDには、免疫機能の低下、亢進の何れも是正する多様な作用があり、免疫応答を調節していることが明らかにされています。すなわち一面に記載したような感染症(風邪)の場合には抗原(ウイルス)を撃退するように免疫機能を強化して対抗します。これに対しアレルギーの場合には免疫系の過剰反応を抑制してアレルギー応答を制御するように作用して内因からアレルギーを抑えるのです。

無病への近道

アレルギーにさらされてアレルギーにならない人がいます。

当研究所の前所長・宇都宮義真は、本紙(昭和42年3月5日発行)に掲載した「忘れられた無病の原因」の記事の中で、病気に原因があるように無病にも原因があり、常識的に考えて健康に役立つと思われるような一般養生法が無病の原因になることを述べています。アレルギーに原因が

あるようにアレルギーにならないのにも原因があるはず。それにはアレルギーに接してもアレルギーに負けない身体造りをするのですが、自然と共生するように日常生活を見直し、光線を常に浴びるように努めることを勧めます。

無病に関係する免疫系は多種多様な外因と闘う過程を経て発達します。子供が生死をかけて感染症と闘うのも、外で泥まみれになって遊ぶのも、免疫系を発達させる上で欠かせないことですが、その際の光線の関わりについては一面に既述しましたので、光線の抗アレルギー作用についてアトピー性皮膚炎で考察します。

光線を照射して皮膚を鍛えることは、同時に免疫応答を調節するビタミンDを生成し、皮膚では皮脂の分泌を促し皮膚表面のバリア(抵抗性)を強め角質層を丈夫にします。その結果、過剰なアレルギー反応を抑え、皮膚病変を修復しますので、アトピー性皮膚炎は治るのです。すなわち光線を照射して皮膚を鍛えることは内因から無病への近道につながるのです。

(免疫異常にはアレルギーの外に自己免疫があります。稿を改めて記載します。)



サンモア光線協会

趣意書

天地創造の昔から、真の光、即ち太陽光線は、私たちに限りない恩恵を与えています。サンモア光線療法は、この太陽光線の健康増進、疾病予防および治療効果を利用した治療法です。従って、目に見える可視光線だけでなく、目には見えないが無くしてはならない紫外線や赤外線を目的に応じて適切に放射しなければなりません。

このサンモア愛用者を以て、光線療法の研究を行うと共に、啓蒙普及活動を行うためサンモア光線協会を設立しました。サンモア光線協会は、設立の趣旨に賛同いただいた会員にて構成し、季刊紙「健康と光線」を発行します。

サンモア光線協会

医学博士 宇都宮 光明

協会では、会員を募集しております。入会希望者は、左記宛御申込み下さい。

〒153 東京都目黒区目黒4-6-18
サンモア光線協会 TEL (03) 3793-5281
三七一-五三三二

(本紙の無断転用を禁止します。)